

愛情込めて育てた自慢の牛が消費者の食卓を彩る。

命の誕生、そして命のバトンタッチ。

全共出場の意気込みを通して池田一成^{かずなり}さんに聞く、

『牛を育てるということ』



池田牧場 ^{まなきよ}『愛潔日本一』 和牛オリンピックに出場決定！

10月6日(木)～10日(月)にかけて鹿児島県で開催される

「第12回全国和牛能力共進会鹿児島大会」

和牛オリンピックとも呼ばれる全国和牛能力共進会(以下、全共)。

各道府県から選抜された優れた牛が一堂に集まり、和牛日本一を決める伝統ある品評会。

7月22日(金)に開催された愛媛県最終審査会。池田牧場で育てられた『愛潔日本一』が全共への切符を手にし、愛媛県を代表して肉牛の部に出品されることが決定した。



【全国和牛能力共進会とは】



各部門ごとに評価する項目が異なり、肉牛の部では肥育牛の肉質などを審査する
全国の優秀な和牛を一堂に集めて改良の成果を競う5年に1度の「和牛の祭典」
全部門合わせて41道府県から選抜された和牛、約400頭が鹿児島県に集結
愛媛県からは「種牛の部」に1頭、「肉牛の部」に2頭、計3頭が出品される

池田牧場が出品する肉牛の部8区は、
24カ月齢未満のオス（去勢）牛であることが条件。

通常の肥育は28～30カ月間行うため、
短期肥育の技術も求められる。

全共の舞台で全国の牛飼いが5年間の成果をぶつけ合う！

※肥育とは・・・仔牛に肉を付けて、食用にするため大きくすること

和牛、中でも黒毛和牛は長い歴史の中で
交配（品種改良）が繰り返されてきた。

牛は昭和20年代まで「肉用牛・乳牛」ではなく「^{えきにく}役肉用牛」と言われ、トラクターのように田んぼを耕したり資材を運搬したりと農家の相棒であった。

昭和30年代以降、高度経済成長期に入りトラクターや化学肥料の急速な普及により農業環境も大きく変化し、大量の役肉用牛が市場へと放出された。それを機に国内での肥育規模が急速に拡大し、現在の肉牛肥育経営が始まった。

現在、町内で肉牛を飼育しているのは池田牧場を含めて4戸となっている。





牛と過ごす日々

一成さんかずなりの一日は朝5時半、肥育牛のエサやりから始まる。エサやりを終えると牛舎の清掃から、一頭一頭の健康状態の確認など作業は正午まで続く。池田牧場のこだわりは抗生物質やホルモン剤を一切使用しないこと。牛の体調管理は倍の手間がかかるが、全ては消費者のため。

「12時から15時の間が自分にとっての日曜日」と話す一成さん。束の間の休息を終えると牛舎へ戻り、気が済むまで牛のお世話をする。生き物が相手の仕事、365日休みなくこの生活を送っている。

出張で牛舎を留守にする時、従業員や家族が牛のお世話をしてくれる。日頃から繁殖牛へのエサやりは妻の弥法さん、仔牛へのエサやりは父の博さんと従業員ちさとの山口千里さんが担当。長男の愛都くんもエサやりや牛の買い付けなど、幼少期から牛に触れてきた。長女の唯那さん、次女の愛那さんも休みの日には牛舎の掃除を手伝い、家族総出で牛のお世話をしている。

子どもたちにとって牛を育てる両親の姿は当たり前。将来の夢を考えたとき、ふと、両親の姿・牛の姿が浮かぶ。

遠回りしてでも選んだ

牛飼いの道

小学生の頃から見ていた牛の世話をする祖父・潔きよしさんの背中。

高校卒業後に工業分野の大学に進学するも、「やっぱり自分も牛を育てたい」と思い、大学を中退し、平成16年に就農。

祖父のもとで牛飼いになるため1年間修行を積み、技術向上と人脈づくりのために宮崎県の学校で1年間腕を磨いた。

祖父は一成さんが就農して10年も経たず93歳で他界。牛飼いを目指すきっかけであり、師匠でもあった祖父からの教えを胸に『池田牧場』の看板を背負って着実に経営規模の拡大を進めた。

当初は、繁殖農家として仔牛の出荷を軸に繁殖牛・仔牛を合わせた32頭を飼育。経営規模拡大のために牛舎を新築して飼養頭数を増やす中で、「愛媛は畜産県じゃない。小規模経営で闘うなら、仔牛だけでは厳しい」と判断し繁殖から肥育まで行う一貫経営のスタイルを確立した。

現在は全体で100頭近くの和牛を飼育し、仔牛・肥育牛共に年間で15頭前後出荷している。



亡き祖父と抱いた夢

「いつか日本一の和牛を育てる」
それは、一成さんだけでなく、
祖父の潔さんきよしんも抱き続けた夢。
どれだけ和牛の姿・肉質を向
上させ、優秀な成績を収めても
『改良組合』という組織がなければ
全共予選さえ挑戦できない。
令和2年4月、えひめ南農業協
同組合の全面協力を受けながら
10年の年月をかけて『えひめ南和
牛改良組合』が発足。ようやく夢
に向けての前進となった。



令和2年10月17日、40キログラムの命が誕生

『ゆいな24』が産んだ**希望**の牛を

『愛潔日本一』と命名

一成さんの長男『愛都くん』

共に夢を追った祖父『潔さん』

希望の牛に二人の漢字

池田牧場の思いを込めて



母牛『ゆいな24』は『愛潔日本一』が初産だった。出産後、母牛は子育てを放棄。一成さんたちが『愛潔日本一』の人工保育に励んだ。

池田牧場では、稲わらの他に3種類の飼料をブレンドしたものを肥育牛に与えている。特に『愛潔日本一』には全共を見据えたプログラムで徹底的に管理をしてきたが、「お肉にしてみるまで、自分の管理が正しかったかどうか分からない。今回の成績が良ければこの2年間が正解だったと、確信や牧場の今後につながる」と心境を語る。

家族経営の中、唯一の従業員である山口さんには『未来の牧場長』として一成さんも一目を置いている。優しく『愛潔日本一』を撫で、手のひらにしっとりとうとう油分を確認。「肉や脂質の状態が手のひらから伝わってくる」と話し、全共1カ月前の仕上がりに自信を見せた。

みんなが毎日欠かさず『愛潔日本一』とスキンシップをとり、声をかける。本番まで答えは分からないが、『愛潔日本一』と結ばれた強い絆が一番の自信につながっている。





いつか出荷される大切な命

通常の肥育期間は28〜30カ月。しかし、全共の出品条件は24カ月齢未満であること。「理想の肉を作り上げるうえで、この4カ月の差はとて大きい」と短期肥育に骨を折る半面、近年の飼料代の高騰を背景に、「4カ月分も飼料代が削減できると経営は大きく変わる」と言い作業を続けた。

一頭でも多く出荷し、飼料代など経費を削減することで経営の安定化につながる。計画的に繁殖、そして出荷される『経済動物』である。

けれども、池田牧場ではオス牛に『^{まな}愛都』、メス牛には『ゆいな』『あいな』と、自身の子どもの名前を付ける。「いつか出荷される命に子どもの名前を付けることへ抵抗を感じる人もいる。それでも、自分にとって一頭が大切な家族」と話し、最後まで愛情を注ぎ続ける。

『愛情込めて育て、
本当においしいお肉を。
食卓に笑顔と幸せを』

池田牧場の信念である。

畜産の現場は決してきれいではない。でも、当たり前前にお肉を食べることがができる日常を支えている畜産の現場を見て、知ってほしい。

また、日々耳にするいじめや虐待などのニュースから世の中の危機感を感じた一成さんは『牛を通して命の大切さを知ってもらうこと』に力を入れ、小学生の牧場見学や中学生の職場体験を毎年受け入れている。

牛飼いの自分だから伝えられるメッセージ、「命をいただいているから、自分は生かされているんだよ」。

『愛潔日本一』は
10月3日(月)に23.5カ月齢で
鹿児島に向けて旅立つ。